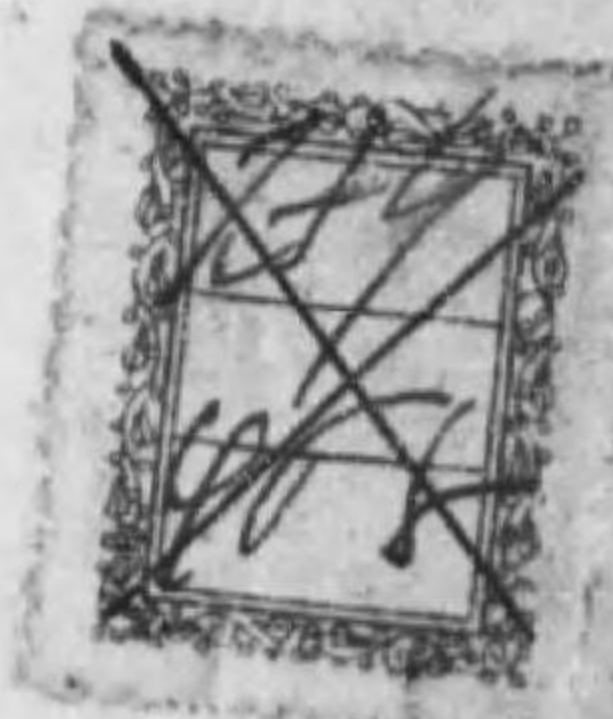


特114

998

大木食以空上人遺稿



始



6739A

特 114  
998



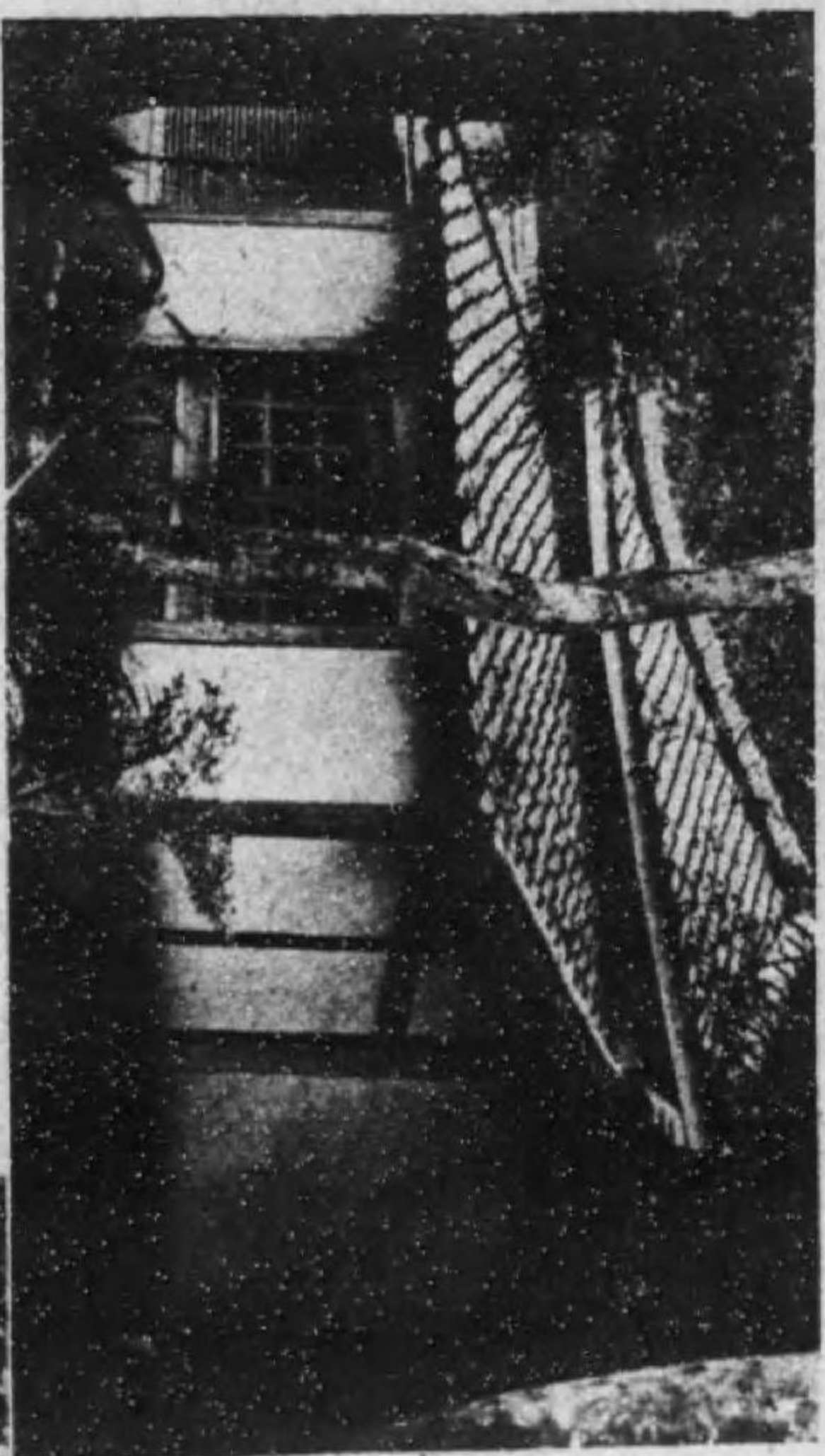
此書拜見せんおりふしはう  
 がい手水をつかふべし同座  
 に置きて讀むこと勿れ。一  
 紙なりども敷くべきなり。  
 天のおそれといひ。秘密最  
 上經を書き出せり。心敬  
 身崇すべきもの也。

大正  
 11. 10. 27  
 内交

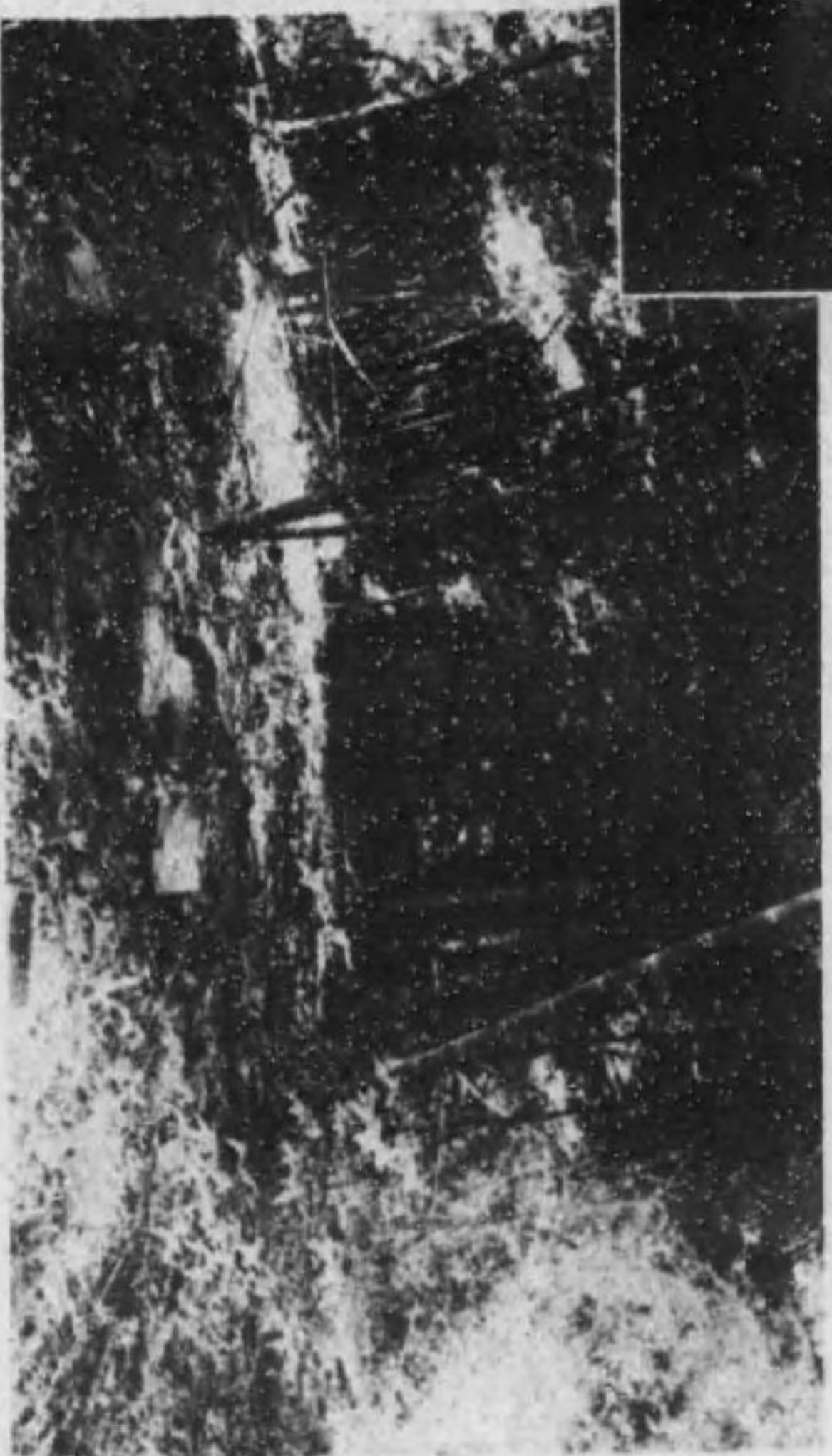
18-71

御 玉 窀  
 傳 誓 傳  
 說 鏡 傳

堂天聖寺尾勝番三十二國四



跡庵呪神谷瀧



寤誓傳目次

天尊の功德	天の謫の下	一
天尊の本誓	抑大聖の下	七
天尊の別願	次に化導の下	一〇
天尊の淨土	將に此天の下	一五
天尊の供養	都て聖天の下	二七
上中下三品	さて此天の下	三四
信者の心得	聖天尊の下	三七
天尊の緣日	次に聖天の下	四一
天尊の法施	さて又の下	四二
信者の諸願	又言く詩歌の下	四五
天尊の引導	就中是の下	四八



窈誓傳

以空上人著

天の謫めも憚らず。自己の淺智短才をしも顧みず。聖天  
 薩陲の本誓功能を略して演説せん。まさしくは盲膏の  
 蛇虺に恐れざるに似たり。謹み敬つて讚嘆し。筆を試み  
 奉る。愚かや。南無大悲大聖歡喜天王は。和光利物  
 の表乎。隨類應現の體相。陰陽二道の根源なり。萬像これ  
 によつて生長し。金胎兩部の教主たり。諸佛これによつ  
 て降誕したまふ。男天はこれ大自在天の所變。本大日如  
 來最期方便の身なり。女天はこれ觀自在尊の應化。十一  
 面の聖容三十三身の妙相を示す。ひこへに是れ慈悲深



重の尊體なり。外には忿怒の形を現じたまふ。雖も内には大いに慈悲心に住したまへば。豈拔苦與樂の薩陞にあらずや。功德の高きこと。天に於て利益廣し。地に在して十方に周遍し。三寶を護り。福德財智。武勇敬愛。願ひに應じて是れを施し。降魔調伏。除病延命。望みに随つて是れを成す。貧乏の族名號を唱ふれば。豐稔の歡花に誇り。卑賤の輩信心を凝せば。高貴の官斑に登る。詩歌管絃の好士は。たがひに伎能をふれ。ここに其名をあぐ。大小顯密の學侶。各法樂を致せば。以て悉地早成せり。當來には決定して。菩提道場に引導せん。誓ひたまふにより。道俗貴賤誰れか。皈敬せざらんや。竊に以るに。億億生死

の中うちに受けがたき人身じんじんを受け。劫劫くわくくわく流轉りゅうてんの間逢まひだひ難がたき密教みつけうに遭あひ幸さいはひに聖天せうてんの法ほふに遇あひ奉たてまつる機緣きげんのいたりなり。譬たとへば盲龜もうきの浮木うきぎ。優曇花うたんげを見しに異ことならず。身潤感しんじゆんかん涙なみまここに禁きんじ難がたし。

一。天の誦も憚らず。……天と者歡喜天なり。又た天理にも通ずべし。今已に此書に演説すること。天尊の冥監窺ひ奉り難し。然りと雖も本誓功能を憚らずして述ぶると言ふ義也。

二。盲曹蛇螻。……謙退の辭也。

三。陰陽二道。……歡喜抄上卷に言はく。聖天菩薩得名者大日如來の垂迹なり。故に大聖と名づく。施作歡樂喜悅の故に。歡喜と名づく。光明自在なる故に。天王と稱す。

四。大自在天。……菩提流支法に言はく。四臂有りと云々。毘那夜迦王

六臂或は四臂各持物有り、四葉座荷葉座金山を踏み、七寶の冠を戴き、右の下手に鉞斧、上手に團盤、左の下手に牙、上手に捧、種々の瓔珞白縹朝霞象頭四臂なり、歸依の輩一切の願望を成する尊也。——無畏の軌に言はく、大自在天の子三千人有り、其の左の千五百は、毘那夜迦王を以て第一と爲す、諸の惡事を行す、其の眷屬十萬七千有り、右の千五百は、扇夜迦善持天を以て第一と爲す、一切の善事を行す、其の眷屬十七萬八千有り、故に篤信の者成就を得、不信の者は、障礙を得る也。

五十一面……前後左右の十一面を以て、十波羅蜜の功德を成す、頂上の佛面は佛果の相也、謂はゆる左邊の三面は瞋怒の相を作せり、此れ即ち戒忍進度の三波羅蜜を顯す也、當前の三面は、慈悲の相を作す、此れ即ち禪惠方便の三波羅蜜を顯す也、右邊の三面は白牙の

上に出る相也、此れ即ち願力智度の三波羅蜜を顯す也、當後の一面は咲怒の貌を作せり、此れ檀波羅蜜を顯す也、頂上に佛面を現す、昔已に成佛する事を表す、此れ即ち正法如來の像也。

六三十三身……普問品所説の辟支佛等の三十三身也、其の名を出すに違あらず、加様に品々躰相を現じ給ふことは、萬機を漏さず、一切有情界を度せんが爲め也。

七外忿怒形……八大童子秘要法品に言はく、金剛手の言はく、一切衆生は意願不同也、或は順或は逆也、是の故に如來慈怒の身を現じ、利益を隨作し玉ふ、解に云はく、諸佛の大悲は衆生を惑む故に、即ち順者に於ては順を以て而も觀じ、若し逆者に於ては逆を以て而も制する也、一佛忿怒三昧に住する時、十方の諸佛も同じく共に忿瞋三昧に入る文。

八福徳財智……… 罽索心呪經に言はく、若し衆生有りて設ひ蹈曲を以て、富貴名利等を求めんが爲めに、此の呪を聞くことを得とも、彼の諸の衆生生々處々に智惠福聚の香を成就す、大富貴の祈り此の天に依る事、——術法上卷——定惠軌——人師安然の書等に見へたり。

九武勇……… 靈驗要術法に言はく、惡人怨心の人去と見へたり。——使呪法經に曰く、菩提留支譯最も衆生を護ること其の所願に隨つて皆満足す。——同經に隱現念に隨ふと見へたり。

十敬愛……… 愛敬軌に言はく、其の獻する所の飲食等の物必ず食す可し、始に氣力増成する事を得、一切貴人男女愛念す。文——秘密成就儀軌文——又番法決(中卷)に、愛敬祈念の事委しく見へたり。

一一降魔調伏……… 式法決に委しく見へたり。——經に言はく、縱令

魔王其の方便を求むとも、終に得可からず、諸鬼神此の善人の十由旬の外に去る。

一二除病延命……… 番法決(下卷)——谷抄に委しく見へたり。——善無畏の軌に言はく、歸依供養の者必ず無量の福壽を得と云々。

一三高貴官班……… 聖天記に見へたり。(安然述)

抑も大聖歡喜男天は、往古如來法身の大士なり。花翼國土に於ては、毘盧舍那佛と現じ、成等正覺の道を補ひ、香集世界にしては、大虚空藏と現じ、福智無邊の聖位なりしが、惡魔降伏、無福短智の衆生を饒益せん。福智嚴淨の門を開き、大聖歡喜天と現れたまふ。故に經に曰く、歸命毘盧舍那佛、一心法界無上尊、事理圓融住虚空、示現大



聖歡喜天云云。今聖天と現ては神力自在十方に満ちた  
まひ。佛法僧を衛護し。無福のものに益を運らし。大慈悲  
を以て衆生を利したまふ。時に使咒法經に曰く。『神力自  
在たる所は諸方に遍歴して。三寶を衛り奉り。大慈悲を  
以て衆生を利益す』と見へたり。又た無畏の軌に言く。『此  
の聖尊自在天は。摩訶毘盧舍那如來。無福の衆生を饒益  
せんが爲めに。此の像を權化示現す』云云。含光の軌に  
は。男天は摩訶毘盧舍那の化身といへり。無畏の軌にも。  
大日を以て男天の本地にす。と記せられたり。此の外證  
文多し。雖も擧るに違あらず。次に女天は本西方の能  
化なり。淨妙國土に於ては無量壽佛といひ成佛の身を

現じ。妙觀察智に住したまふ。雜染五濁の世界に在して  
は。觀世音菩薩と顯はれ。衆生濟度の聖位なりしが。無慙  
の悪人を利せんが爲めに。大慈大悲の門戸を出で。歡喜  
女天と成らせたまふ。されば理趣釋經に曰く。『得自性清  
淨如來。とは是れ觀自在王如來の異名なり。則ち此の佛  
を無量壽佛と名づく。若し淨妙佛國土に於ては成佛の  
身を現じ。雜染五濁世界に住しては。觀自在王菩薩と爲  
す』と云云。含光の軌に女天は十一面觀音と見へたり。或  
る經に曰く。『我身常在極樂世界。我名大自在王如來。とあ  
りけり。大聖二天の本地略是の如し。』

一四抑。……發端の辭是より正しく本文也。

一五 往古如來……愛敬軌に言はく、大日世尊身を成せしむ。——菩提留支法に言はく、聖天菩薩應迹利生の故に、男女二天の貌を現す。  
 一六 花翼國土……密嚴國土にして大日法身の淨刹也。  
 一七 香集世界……虚空藏法界宮也、則ち菩薩の淨土也。  
 一八 濟衆生苦惱……形求鈔に言はく、此の天の大悲是の如し、衆生の苦惱を濟ふ最後の方便也、又た番法決式法決術法秘呪を以て、衆生の邪願をして終に一實妙道に入る、一門邪途を以て普門の心深を顯す故也。

次に化導のあらましを演れば、大聖歡喜天王は天上天下の魔群を退治し、二世の利益を施し、世々の衆生を化度したまふ。明文含光の軌に經を引て曰く、「我れ化度の爲めに衆生に隨類し、普賢最後に毘那夜迦を現す」と見

へたり。將に知るべし。聖天の利生方便は自餘の佛神に超過し、二世の悉地を得ること。此の尊にしくはなし。夫れ人間の榮耀といひ、世上の運命といひ、諸神を頼み奉れども、非禮を受けたまはざるが故に、所願を求むる者丹誠屢空し、諸佛を仰ぎ奉れども、宿習によるが故に、宿善無き者は素懷達し難し、一向首を低れ、掌を合せ、身心をくるしめ、朝に祈り、夕に賽すの勤めも、只空く幣を費すに似たり。然るに今此の歡喜天王は、猶無慙の悪人を捨てさせたまはず。譬へば賢父の愚子を慰むに相同じ。いかに況んや有縁の衆生に於てをや。宛も明王の行者を頭上に置いて恭敬せんとのたまふがごこし。まして諸

佛諸神餘天等に至るまで捨て果てたまふ願主なり二三  
も。聖天尊を念じ奉れば即時に悉地をあらはし。皆満足  
する。ことを得。證文使咒法經に曰く。『若し人諸天の爲め  
に捨てられんに。我を念せば即時に悉地を現じて皆満  
足す』云云。聖天には微妙の法あり。肆に大願を起さん  
もの。先づ此の天に皈すれば願望を成ず。大名を求めん  
人此の尊を仰ぐに必ず宿望を達す。各々面々の祈願空  
しからず。唯是れ聖天の別願に限れり。詳なる本文使咒  
法經に曰く。『我れに微妙の法あり。世間に甚だ希有なり。  
衆生受持する者には。皆與へて願の如くに満足せしめ  
ん』と説きたまふ。あな尊しな諸佛菩薩の群類を度す。皆

此尊の方便なり。諸神權現の衆生を化する。寧ろ此天の  
善巧にあらずや。十方諸佛の利益に預らん。ご思は。此  
天を供養すべし。一切諸神の冥助を蒙らん。ご思は。此  
尊を恭敬すべし。一尊一天を讚嘆致す。ご雖も。あまねく  
諸佛諸神の威光を益す。これによつて宮中の御修法を  
はじめ。其外大法秘法修行の砌。必ず此天を供養せり。立  
壇祈念の所。専ら此像を安置せしむ。さるによつて悉地  
早く圓滿す。故に無畏の軌に言く。若し此法を知らざる  
者は。餘尊の法に於て成就を得難し。ご見へたり。此故に  
吾我聖天を恭敬供養し奉る。まここに誓願殊勝なり。明  
文使咒法經に曰く。『我れ順世の法を行じて。世に希有の

事を示し我れ能く其願に隨はん。』と演べたまふ。

一九つきて。……前を結び後を生ずるの詞也、上は經軌の旨に任せ、

男女二天の本地を顯し、已下は尊の本誓功能を述ぶるなり。

二〇利生方便。……利を興へ生を安ずるの心也、方便とは醫師の病に應じて藥を興ふるが如く、衆生の機に因て法を説くを方便と云ふ。

二一丹誠屢空。……面を赤くし、息も絶へづくに祈る義也。

二二賽。……至心に信ずるを言ふ。

二三捧物。……幣帛は清淨の捧げ物也。

二四悉地。……梵語此には成就と云ふ、宿望叶ふ義也。——愛敬圓滿軌に言はく、(一行阿闍梨述)現當二世悉地圓滿せずと云ふこと無し、亦十方の諸佛菩薩及び金剛威德護世八天、恒に呪を持する人の前

後左右に立て、守護して繁に捨離せずと見へたり。——悉地を得たる僧、眞台兩宗に多し、中にも仁和寺の成典僧正は、供養法の印明を結ぶ時、聖天舌打し給ひ、小野の仁海僧正は聖天に對面して委細に答談し給ふ。

二五大名人達宿望。……靈術法に言はく、至心に聖尊を供養すれば、自然に象兵馬兵牛車等の兵軍を得、諸の國王を隨へ、以て所從と爲すこと鐵輪王の如しと云々。——又た城邑殿宅を鎮むる也。——又田畠庄園五穀七穀等の上味を得て富貴たり。

二六御修法。……宮中に於て毎歲正月八日より十四日迄、一七日時の法務行はる、天長六年弘法大師大唐の内道場に準じ、宮中に眞言院を建て、承和元年より始行す。

將に此天の常住の所を記さん。聖天の本宮は七金山の

隨一にして毘那夜迦山と名づく。又は鷄羅山とも號せ  
り。此方よりは北の方少し乾に當りて安座したまふ。神  
力自在なれば三界の中に於て其劫究め盡るこそ能は  
ず。さるによつて十方に分身したまふ。始め密嚴化藏の  
土より終り分段同居の郷に暨んで塵刹微塵刹の刹に  
して。至らざる所なく。沙界恒沙界に現じたまはざる所  
なし。上は碧落到に遊び。下は黃泉に入り。生々世々に利益  
したまふ。此の時として止まるこそなし。されば使咒法  
經に曰く。『我れ三界の中に於て神力に自在を得。劫を窮  
むるも盡すこと能はず。』と説きたまふ。聖天と名づけ奉  
る。此は至徳甚だ高く。内證尊きが故なり。世間に聖賢

の二つあり。聖を以て最上とするに相同じ。四民をしな  
へて。此尊を養さずばあるべからず。自在天と號して  
は。智惠自在なるが故に。才智能辯を願ふ人。此天を信ず  
べし。又た雙身毘那夜迦王といひし時は。敬愛を成じた  
まふ故に。愛敬を好む人。専ら此尊を仰べし。六臂天と現  
しては。五穀成就を本としたまふ故に。農民殊更に此天  
を念ずべし。此の如くの名號不同なること。懔瑟軌に見  
へたり。此外經軌等に數多の尊名出せり。具には記し難  
し。或る時は荒神と變身して。三尸不善神を退治したま  
ふ。此の三神は人の胎内に入りて惡事をすゝむるもの  
なり。委しくは大清淨經に説たり。聖天荒神同體異名の

事は成蓮抄に見へたり。すでに小島の先徳には變身荒  
神なり。ごあらはれたまふ。故に小島荒神ご申してこれ  
あり。荒神は日本にては勝尾寺に初めて出現したまふ。  
此故に根本ご稱せり。其沙汰山の縁起に詳なり。又た或  
る時は司名神ご化身し。南閻浮提の衆生。善惡の作業を  
記したまふ。されば此天を別して敬ふべし。變化無量な  
れば筆端に染められず。秋津國は神國なるが故に天照  
大神ご現じたまひ。惡魔を萬里の外に拂ひ。災難を千里  
に除き。福智家の内に生じ。命は鶴龜の齡を持つ。一生の  
終りに苦患を脱れ。惡趣のさはがしき難を斷ち。遂に極  
樂の直路に導きたまふなり。證文神道灌頂誦文に曰く。

『惡魔を萬里に拂ひ。災難を千里に滅し。福智家内に生じ  
壽は龜鶴の齡を持つ。死期には苦患を遁がれ。惡趣の嶮  
難を斷ち。極樂の直路に往く』云云。聖天尊を天照大神の  
御本地ごいへる事。神祇秘釋に見へたり。しかのみなら  
ず。神抄等に書き載せたり。先づ兩宮を配別するに。外宮  
は男天にて御座す。其故は御神體大日の三昧耶形金色  
の不滅の身なり。内宮は女天にして御身體十一面觀音  
の三昧耶形金色の不滅の身なり。暫らく分明ならざれ  
ごも。惣して神慮の秘事は。輕々しく申さ。れば微細に  
は。これを書せず。今記す。ところは伊勢灌頂ごいふ大事  
に依つて。これを述たり。強て所望の人は。眞言行者に尋

ね聞くべし。此外確なる事のみ多し。二所大神宮奥之院  
田丸の田宮寺の御本尊。二見浦造營の時の御代木等深  
秘の事あり。其沙汰こゝに略せしむ。此故に諸の巫祝聖  
天を崇むべし。此天不信の輩には無量の眷屬十方より  
來たり障昇を爲す故。出家在家に限らず。所願成就せざ  
るは是に依てなり。殊更眞言行者の修するところの功  
徳を奪はん。こす是れ眞言は元々佛果を成ずる法にし  
て。凡體を改めず。覺王となり。土砂を加持して。金寶を爲  
すは。眞言不思議の加持力にして。是れ皆な秘密最上經  
の甚深の徳なればなり。さればこそ龍猛菩薩の論の中  
には。『惟眞言法の中にのみ即身成佛の故に。是の三摩地

の法を説く。諸教の中に於て闕して書せず』と釋したま  
ふ。此の菩薩は諸宗の祖師なり。是を能く觀ずべし。かや  
うに法位至徳高貴の故に奪はん。こす。然れども聖天尊  
を恭敬せしむるに於ては障を除くべし。含光の軌に  
言はく。『慈の善根力を以て諸の毘那夜迦をして歡喜心  
を生ぜしめ。障を作さしめず』とこれあり。故に自ら偏に  
崇敬し奉る。我れ聖尊を信ずること。既に八年の春秋を  
經たり。年月に隨順し明鑑の大益を蒙ること。其數多し  
と雖も。世に疑心の人あれば。其功現を顯さず。慈かへつ  
て科を與ふる類ひ也。是れ全く愚身の修力にあらずし  
て。本尊名體の故なり。此尊像は高祖大師請來の内に自

餘の天像に勝れさせたまひし生身の聖天なり上古は  
暫らく之れを擱くべし。中古子島の上綱に直に秘印を  
授けたまひ。又は變身荒神なり。現れたまふも此像な  
り。其後に至り。行者の善惡により賞罰の著るしきこと  
今にあらたなり。予此本尊によりて花水浴油兩供養百  
日廿一日修行し奉りて。當山に安置す。凡そ勝尾寺の聖  
天は。本朝無二の靈天なれば。此故に密像たり。數なりし  
事は縁起に記せり。世の人歩を運ぶべし。

二七七。金山。……妙高山は其高さ十六萬踰繕那也。次の七金山は純  
金の所成也。七金山と者一には持雙山と名づく。二には持軸山。三に  
は擔木山。四には善見山。五には馬耳山。六には毗那怛迦山。七には尼

民達羅山上の如く、七金山周匝して妙高山を圍繞す。此山は聖天神  
呪を説き給ふ所也。

二八。聖。……聖は聲也。言はく聲を聞て情を知る故に聖と曰ふ。又た  
事に於て通せずと云ふこと無し。之を聖と謂ふ。

二九。荒神。……菩提留支法に言はく、荒神王三摩耶身と爲す。一切衆  
生の障礙神王也。過を轉じて福と爲す。秘術併せて此尊の三摩地に  
有り。如來大慈護の垂應。一切有情生死愛着の相也。——歡喜抄に言  
はく、此天に供せざれば一切の諸事過を覓めて障礙を成す故に、障  
碍神王と號す。勝事を破壊するに依て荒神と名づく。——善無畏の  
軌に言はく、毗那夜迦神形を現じ舍利弗に告て言く、我れは是れ三  
寶荒神王那行都佐神也。我れを敬はざれば、男女常に貧窮無福にし  
て、多病短命なり。人の爲めに勝たる所をして、我像を供養せば福智  
無量なり。云々



三〇三尸不善神。……大清淨經に言はく、三尸とは人身の内に在る魂魄の鬼類也、人をして永く不善の事を増さしむ、又諸病を成し、庚申の夜昇天して人の科を訴へ、人の命を奪ふ者也、三尸の形は人に似て長さ三寸許也、正者彭俗言く黒色頭に居す、人をして車馬衣服を好ましむ、中者彭質言く青色胸に居す、人をして諸味を好ましむ、下者彭矯言く白色腹に居す、人をして淫泆を好ましむる也、是を三尸不善神と名づく。

三一子島荒神。……神形大丈夫の相姿、寶冠の緒を頤の下に結ぶ、右の手に寶珠を持し、左の手に輪寶を執り、荷葉に座すと縁起に見ゆ。

三二勝尾寺荒神。……日本出現の始也、元亨釋書並に山の縁起に之れ有り、八面八臂と言へり、此の像以空兩度遷宮す、則ち自書之れあり、八面二臂にして如來荒神と言ふ木像と也。

三三濟後世。……定惠軌。——谷抄に經を引を見たり、弘法大師彫刻

せる金剛峰寺の石像の胎藏中臺は是れ聖天の像也、深く之れを思ふ。

三四神祇秘釋。……無題記に、天照大神の本地を聖天と號すと有り。

三五密經。……和州久米寺疏記に言はく、善無畏三藏開元四年丙辰印度より震旦に来る、玄宗皇帝敬して國師と爲す、而して東土邊州利益の願に依て、大日經を賣持して、獨り鳥卵の馬臺に入る。——八祖の内の第五師也。

三六明鑑の大益。……以空此の聖天に年來歸依せり、靈瑞を感ずること其の數多し、其中寛文十稔五月十日、勝尾寺の瀧谷に於て、夢裡に四臂童子の現するに相逢ふ、空死難を除くの印明を授かり畢ぬ、童子一偈を説く、所現和光利物表、事理圓融遍法界、衛護三寶度衆生、我即大聖歡喜天、文——其像は空自ら刻み、圖書し、山崎觀音寺に遺し置けり、其餘は之を略す、是れ守加持の印也、既に貞亨前、今の兩帝

の勅を奉じ、御守調へ認め献上す。

三七子島寺。…：聖天出現の地なるの故に子島寺と曰ふ、元は觀覺寺云々、草創は人皇五十代桓武天皇の御宇、和州高市郡なり、開山舎光は智行兼備の名師也、二百餘年の後上綱再興す。

三八上綱。…：真興僧都の言はく、上綱は河州の人也、南都に於て成長す、松室の仲算に順ひ、法相を學び、吉野の仁賀に密法を受く、聖天親しく秘印明を授け、荒神の出現を見る、藤原教通都率の内院を拜せんが爲めに、鬼神を降伏す、人皇六十六代一條院歸依の僧也、寛弘元年十月十四日、子嶋觀覺寺にて寂す。

三九修行。…：使呪法經に言はく、一日の中或は一時三時文。——又言はく毎日三時。

四〇勝尾寺聖天。…：天和二年八月十五日、山崎觀音寺に飛來る、茲に因て鎮守と爲す、寶殿は夢想に依り、從て本院を造立す。

都て聖天眷屬は十萬七千あり、是れ則ち無畏の軌に書せられたり、是等障碍を爲すこと計なし、雖も天尊を信じ奉り、此眞言を唱ふれば、聖天及び諸の眷屬皆其人の前に現じ、假令惡事に向ふことも、常に隨ひて護りたまふなり、證文使呪法經に曰く、『若し我陀羅尼を持たば、我皆其の前に現じ、惡に向ふことも及び眷屬常に隨ひ衛護を得せしむ。』と説きたまふ、其の十萬七千の上主は四天王及び諸仙俱摩羅軍衆、阿吒薄俱元率、大將、四夜、双等、是れ皆聖天眷屬の上首なり、金剛智經に明かに説けり、又言はく、諸の星は四天王の眷屬なり、此故に此天尊は諸星の中の尊主なり、是れに依て聖天を念じ奉れば、大海

二八  
江河深山の嶮き。溢れたる所を過て。いさゝか障りなし。  
或は獅子象虎狼毒虫ゆめ。蠱を爲さず。諸神の祟も  
こよりこれなし。何れも諸人に蒙むる。雖も殊更路道  
往還渡海の人は。別して此天を祈り奉るべし。信文使咒  
法經に曰く。『險難の處大海及び江河深山險隘の處を過  
ぐるに。獅子象虎狼毒蟲諸神の難も。我れを持たば皆安  
穩なり。』と説きたまふ。或は又宿業によりて。有恃の命葉  
爰に蹙まり。狀を害せられんに。聖天尊の眞言を誦持す  
るに。其難を脱れず。こいふこごなし。かく定まりし災難  
だにも滅除したまふ。こごなれば。まして諸願敢て何事  
か空しからざらんや。然る間男女を別たす。此眞言を授

かりて。平生怠らず唱ふべし。魚鳥を食したらん時には  
漱手水を爲し。姪を犯したらん時には。沐浴して専ら清  
むべし。されども印相は許す僧あり。こも必ず授かるま  
じきなり。悉くは下に至りて記すべし。爰に於て眞言  
字儀の功德等深秘に亘るの恐れあれば。今は是を略す。  
若し篤信にして世に勝れ。所作の善事諸人に越へ轉た  
細心研覈の人は。眞言行者に尋ねて聽聞すべし。此輩に  
は。憐愍なく。誰ならんも心に任せず。こいふこごなし。先  
づ害を脱る。明文を引かん。使咒法經に曰く。『百種の害  
を加へ惱ますもの有らんに。我が陀羅尼を誦せば。解脱  
せざる者無し』と説きたまふ。若しは夜行に燭なふして。

闇冥の處に獨りのみ到ることも。天尊を念ずる人には隨  
身して守護したまふにより。更に恐るゝこと無し。又は  
盜賊害を爲さんごすれども。聖天智慧の索を以て彼を  
自ら縛たまへば。手足攀により。目のあたりによるべき  
ことなし。或は軍陣に限らず。大敵に向ふて。隠れんごす  
れども。其所をもごめざるに。爰に於て。南無大聖歡喜天  
ご念じ奉れば。聖天遊行あることも。即時に其前に到りた  
まひ。神通力を起したまふ故。隱顯念に隨ひ。出入誰あつ  
て觀へきにあらず。明かなる文證。使咒法經に曰く。獨闇  
冥の處に行かん。我れに依らば。皆無畏なり。劫賊忽然  
ごして。侵さん。我れ皆自縛せしめん。云云。又曰く。我

れに遊行の時。有んも。我れを誦すれば。即時に至る。ごも  
演へ。或は「隱顯能く念に隨ふ。出入等き所無し」ごも説き  
たまふ。歡喜天頌には。『盜賊則滅。衆怨悉退散』ご見へたり。  
衆怨悉退散。ごいふ文は。射弓も。其身にたつまじごなり。  
此故に。武勇を專ごする人。只管に。此天を仰ぎ奉るべし。  
又は。世上に。陵突の者ありて。調ふべき事を破り。成ずべ  
き義を。竭きて。萬につけて。悪事を爲さん。此尊を頼み  
奉れば。聖天神力の棒を以て。其悪人を打ち碎きたまふ  
より。願ひも。調成せしむるなり。或は。侵燒の者ありて。言  
語を。詐り。人を罵しり。親しきを疎なし。因みたるを遠ざ  
け。是れによつて。諸難起りぬるに。此天を頼み奉れば。天

尊其者を悪しみ、斧鉞を以て頭上より身にいたりて。七つに打破りたまふなり。是等の證文使咒法經に曰く、『世間陵突の者。我れ悉く摧伏せしめん』と云云。又曰く、『侵燒の者有らん。に頭破作七分』と説きたまふ。

四一 聖天眷屬……妙臂經に四部の眷屬を出せり、聖天具書中に四部の法有り、一には權懷部七俱服、二には野干部十八俱服、三には牙部六十俱服、四には龍象部那由他千波頭摩有り、波頭摩と者數量を出す也。

四二 眞言……如來の言眞實にして虛妄無し、故に眞言と曰ふ。——蘇波呼童子經に曰く、眞言を離れて、外に更に別法の能く衆生に樂を與ふる者無し、云々。

四三 天眞言……使呪法經に言はく、爾の時に毘那夜迦、此の偈を説

き世人に告げ、處世陀羅尼法を説き、最も衆生を護り、其の祈願に隨て皆満足を得せしむ、當に須らく日夜に誦持して、萬遍乃至十萬遍を滿つべし、皆所説の如く即ち虚空に昇ることを得ん、即ち呪を説て曰く、云々

四四 滅罪成就……術法(下卷)に見へたり。

四五 俗に印を授けず……不空の軌に言はく、此聖天祕要法は世間に希有なり、實に之を傳ふること勿れ、云々——金剛界九目天法に言はく、(金剛智譯)一期最後命終に臨むの時、一國中の一人に傳授す可し、兩人に傳ふ可からず、云々——肝要集にも此の如し、兒嶋の上綱は印明の傳授を作さず、云々。

四六 字義……聖天の呪梵文の字義なり、總じて梵文は天竺所用の字にして、法爾の法門なり、形音は解し安く、義は容易に解し難きなり。

四七研覈。……眞實にして正しき義也。無機子曰く、論藏は眞を研き正を顯し、偽を覈へ、邪を摧くと云々。

四八顯盜賊。……蘇悉地(中卷)に見へたり、盜人の頭を以て此尊の三形と爲す。——又た寂圓記に見へたり、上古は之を擱く、建保四年二月五日の夜、東寺經藏の道具佛舍利盜まれし時、種々祈禱有り、雖も驗無し、賢海法印浴油修行せられ、結願のとき好相有り、獄中より舍利の在る所を指さすと也。

四九勝相論。……術法(上卷)並に無畏の軌に經を引て、委しく見へたり。

五〇除口舌。……述法(上卷)に詳に見へたり。

さて此天に三品の供養あり。世の人大願あらば此の供養を爲すべし。使咒法經に曰く、「上品に我れを持たん者

は我れ人中の王を與へん。中品に我れを持たん者は我れ帝師と爲ることを與へん。下品に我れを持たん者は富貴無窮也」と説きたまふ。謂ゆる上品の供養といふは、浴油供といふ。阿闍梨職位の僧を頼みて、此法を修行するに人中の王を與へん。誓ひたまへば、餘願いかでか成就せずといふ事なし。中品の供養とは、花水供といふ。眞言行者に頼むべし。此供養を爲すものは、帝の師範なることを與へん。誓ひたまへば、自餘の望みなごか叶はずといふ事なし。下品の供養といふは、時に限らず出來たるもの、上分を採りて、聖天尊に供じ奉る。是れ不斷の儀なり。此の如く供養する人は、富貴極まりなし。

説きたまふにより。出家公卿を始め士農工商此天を供養し奉らずばあるべからず。今記す下品の供養を爲すに備へざる物あり。柑子。梨子。蓮根。茸は誤ても供養せしむまじきなり。梨花までも立花に用ひず。蓮花は立花に用ひて宜しきなり。此故に行者は蓮根茸を受用せず。在家には食すべきなり。此二種用捨するここ譬喩經に曰く『蓮根食者不得成佛』と見へたり。茸を食せざるここは有情輪廻經に曰く。一切衆生佛性有り。雖も茸を服すれば永く成佛せず。説きたまふ茸を食すれば十失あり。大寢癡狂頓死。霍亂疾病。白癩失念。暗目。魔縁得便。最期無訛なり。こいへり。決して是れを食すべからず。經論等

に此由見へたり。釋尊も茸を食したまひ。七日惱亂あり。て説法中絶す。十重斷結經に説きたまふ。總じて茸は大毒なる。ここは本草綱目に審に注せり。柑子。梨子の二種は意趣あつてこれを書せず。

五一阿闍梨……梵語なり。茲には軌範と言ふ。法の師と言ふ心也。

五二福智圓滿……秘密法儀軌に言はく、(不空譯)此の聖天菩薩を供養し修行し奉る時は、必ず福智を圓滿せしむ。

五三立花……時分の美花なり。——又柘榴尤も宜き也。

聖天尊を信仰して。本尊の内證に契ひ奉る趣。あらまし連ねん。在家に於ては四足五辛を縁日に食すべからず。此二つは聖天に限らず。諸神の前に到りて百日穢る。

なり。是れ參宮記に見へたり。又大酒を好むべからず。生死の火を忌むべし。女人は月のさわりありし折節は拜し奉るべからず。姪を犯したらん時には沐浴すべし。行者は不姪なり。總じて身體清淨に持つべし。爪なご長く垢ありしこそよろしからず。行者長髪も悪き故に我れ一月一日の入堂のつゝるでに沐浴しけれごも。唯今にいたり。兩日洗身しけり。菓を食し冷水をむすぶ故に垢穢の不淨も餘人とは異。雖も天清淨身を好みたまふにより。天心に隨ふべし。世の人は是を思ひ又魚鳥を食したる時は隨分漱手水を爲すべし。蘿蔔の根を生にて食すべからず。行者は曾て食せず。聖天には第一に獻じ奉

るべし。俗には是を大根といふなり。下供物は食すべし。此外。神酒。飲食。雜菓。香花。燈明。心に任せ供養をなし。法施には。光明眞言を唱へ。天の眞言は必ず誦持すべし。此の如く恭敬供養せしむる輩は。二世の願望一として成就せず。こいふ事なし。聖天下供物は。當日精進無くして用ゆべからず。又在家に於て此尊像を安置するこそ勿れ。種子を開眼して本尊。或ひは守に要ゆへし。此天尊は内證貴きが故に。行者は持齊にして十善戒を持つべし。其の十善戒。こいふは。不殺生。不偷盜。不邪淫。不妄語。不綺語。不惡口。不兩舌。不慳貪。不瞋恚。不邪見。此等を護持するなり。此戒受持の功德は。經に曰く。若し能く十善を行じ。正



法の教おしへに隨順すむじゆんせば、生生せうせう常つねに佛ぼつを見み疾はやくく無む上じやう道だうを成じやうぜ  
ん』ご云云。

五四生死せうじを忌いむべし。……兩親りやうしんは七々日しちしちじつ。伯父はくふ伯母はくぼと兄あには三七日さんじちじつ。弟てい

と從弟じゆんていは十二日じふにじつ。合火がうかは七日しちじつ。産母さんぼは七々日しちしちじつ。夫つまは三七日さんじちじつ。合火がうかは七日しちじつ。

五五沐浴みよく……以空いこ十年じゆんねん禁足きんそくの内うち。一月いちげつ一日いちじつ巡堂じゆんたうの序しゆに沐浴みよくす。

五六供團くわん……大日經だいじつぎやう並ならに同疏どうしゆの第七だいしちに委まかしく述のたまべたり。——菩提ぼだい

留支軌りゆしき——善無畏軌ぜんむゐき——使呪法經しじゆほふぎやう——他門抄たもんせう——慈記等じきとうに功德くふとく

を説とく。——團涅拌經だんねはんぎやうには歡喜丸くわんぎわんと號なづす。

五七大根ごしちだいこん……權現ごんげん歡喜法くわんぎほふ。菩提留支軌ぼだいるしき定惠記じやうゑき。不空譯ぶくうやくに功德くふとくを述のたまべ  
たり。

五八酒ごはちしゆ……均等記きんとうき——歡喜法慈記くわんぎほふじに委まかしく功德くふとくを述のたまべたり。

五九天像ごじゆんてんざうを在家ざいけに安置あんじせず。……都記とぎに委まかしく見みへたり、不淨ぶじやう多おほき

が故也。

六〇種子ごくしゆ……大日經だいじつぎやうの疏しゆの七しちに言いはく。此法身こほふしんを以もつて遍まく衆生しゆじやうに

施せさんと欲ほつするが爲ための故ゆゑに、自在じざい神力しんりきを以もつて是こゝの如ごとく法爾ほふにの聲字しやうじ

を加持かぢす故ゆゑに、此こゝの聲字しやうじは即すなはち是こゝれ諸佛しよぼつ加持かぢの身みなり、此こゝの加持かぢの

身みは即すなはち能よく普ふく隨類ずいるいの身みと作なて在あらざる所ところ無し、當あたりに知しるべし

加持かぢの聲字しやうじも亦また復またた是こゝの如ごとく、種子ごんしゆの字じは即すなはち是こゝれ佛菩薩ぼつぼさつの身み也。

六一持戒ぢけい……陀羅尼集經だらにじふぎやう第九だいじゆに言いはく、一百日いちひやくにち内うち更さらに道場だうじやうの外ほかに

出いることを得えざれ、宿しゆくして姪めいを行いずれば破やぶる。速すみに成就じゆじゆを得えること

かたし。——儀軌ぎきに言いはく、未來みらいの行者ぎやうじや如來にょらいの禁戒きんけいを持もつて姪めい慾よくを行い

せざれ、一百日いちひやくにち内うちには必かならず法ほふを成就じゆじゆせん。

六二十善戒じふにぜんけい……十善戒じゆぜんけいと者源しやげんと輪王りんわうの所製しよせいより出いでたり、然しかりと

雖なほも佛出世ぼつしゆつせして、名言めいごんを改あらめず此こゝの戒けいを授たまへり。

次に聖天せうてんの緣日えんにちを出いさん。月つきの二日ふたにち、四日よつにち、八日やうにち、十五日じふごにち、十

七日。十九日。廿三日。晦日。云云。是れ則ち金剛智經に説きたまふ。此外不空の軌弘法大師の御釋使咒法經の説等。悉く縁日異なれり。某思惟ありて。勝尾寺の聖天は。月の十六日を縁日と定めけり。是れ私に。あらず。經説を以て。なり。殊には。天供修行の吉日といひ。息災。増益。敬愛に用ゆる日なり。これのみ。に非ず。深心あり。これによつて。定日とせり。

六三縁日。……十六日は金剛峰日にして、大吉日也。

さて。又た。聖天。光明眞言を納受したまふ。ここ。雙身天王。は大日彌陀の垂跡なるが故なり。此神咒は。兩軀如來の心中秘密咒といひ。殊には。萬億無數の諸佛如來の密言

なり。此眞言を誦持するものは。菩提の益を蒙むるのみならず。かねては。世間の願をも成就す。實に。是れ如來不空の大印。法王警中の明珠なり。さるによつて。儀軌に言はく。『此の光明眞言は。萬億無數の諸佛如來の心中秘密呪なり。誦ずること。一返すれば。萬億無量の大乗經。百億無量の陀羅尼。百億無量の法門を誦するなり。三世一切の諸佛は。光明眞言を誦して。速に菩提を成じたまへり。』云云。三世諸佛はこの咒力によつて。正覺を成じたまふ。一切衆生はこの眞言を誦じて。成佛を得るなり。又た本軌に言く。『此眞言を誦持すれば。一切の天神地祇皆悉く。歡喜悅可す。』と見へたり。此故に。聖天別して。納受まし

念ずることあらんには。皆叶へ遂げん。祈るに隨ひ  
悉く満足ありなん。假令悪事多く來ることも。能く守を加  
へたまふにより。如意安全にして住居歡喜の眉を開き  
舍宅清淨にして安からしむこと。使呪法經に曰く。念ず  
るもの有らんに皆構遂せん。隨つて威な満足すること  
有らん。設衆惡來たり侵すことも。我れ悉く能く加護し。我  
れ其の意の如く住居吉慶舍宅悉く清寧ならしむ」と説  
きたまふ。

六四正覺……正覺壇花臺の上に於て等正覺を成ず、此佛を理趣經  
に三界主と説く、三界は三密三寶等也。花臺正覺は得果なり、是れ即  
身成佛也。

又言く詩歌管絃の好士。名を求めんご思は。此天を願  
ふべし。卑賤の輩官位に預らんご思は。此尊を憑むべ  
し。聖天の至徳により。國王に召され位に任せられなん。  
貧乏の族も。珍らしき寶を求め。家豊に七寶莊嚴を望む  
者は。此天を念すべし。世に希なる珍寶積で。悉く満足せ  
しむ。是等の證文使呪法經に曰く。『名を求め官に遷まん  
こと有らんに。我れ國王をして召さしめん。世の異寶を  
求むるもの有らんに。世をして珍利を積み。家豊に七珍  
に足らしめん。世の皆希有とする所』なり。説けり。夫婦  
不和なることあらば。偏に此尊を憑むべし。和順し睦じ  
からず。さいふことなし。男女美名を得ること。准へて言

はふ。露結び霜凝りて草木玉を連れ會場を嚴るに異な  
らず。使呪法經に曰く。『色美を求むるここ有らん者。願を  
發せば宛然として至る』と云云。又た曰く。『男女美名を得  
て夫妻順て和合す』と説きたまふ。又た金谷の春の朝に。  
香美の花を弄び。南樓の秋の空に晶き月を愛し。いろめ  
くありさま。逍遙第一を好むものは。尙此尊を念ずべし。  
樂み快くして宛も乏しき所なし。常に娛樂を相欲ふも  
のは。専ら此天を願ふべし。皆満足せずといふことなし。  
奴婢各群を成して。望みを極むるならん。懷妊の女人は  
一向此尊を念ずべし。安産せずといふことなし。行歩自  
在を得せしめんとなり。明文を出さん。使呪法經に曰く。

『逍遙して自ら快樂す。宛然として乏き所無し』と云云。又  
た曰く。『恒に相娛樂を欲ふに。宛も満足せずといふこと  
無し。奴婢列つて群を成し。美女衢庭に満ち。遊行に自在  
を得ん』と説きたまふなり。除病延命福德を願ふものは  
別して。此天に恭敬を爲すべし。一切の狂人及び諸の疾  
病。腫物瘡痛等に至るまで。悉く本復せずといふことな  
し。壽命長遠にして。福自ら進み臻らん。この誓願なり。又  
は。怨念咒咀の惱をも退散したまふ。されば。證文使呪法  
經に曰く。『須らく遠近と言ふことも。神狂及び疥癩と疾  
毒と。衆く利せずといふこと莫し』と云云。又た曰く。『壽命  
悉く長遠に。福祿自ら遷至す』と説きたまふ。歡喜天の頌

に言はく。『怨念咒咀衆怨悉く退散す』と見へたり。誠に本誓勝げて計へ難し。總じて此天を常に信ずるものは願はずとも貧なることあるべからず。其故は能く測り知る者無しと説きたまへり。

六五惡心怨心嫉妬を除く。……式法谷抄に見へたり。

就中是れ一生の利益のみに限らず。百年遂窮取後臨終の砌は男天は無数の眷屬を引具し。四魔の群黨を破壊して。菩提道場に引導し玉ふに。四天王天蓋を覆ひ。女天は百寶の花臺を擎げて。九品の淨刹に迎へ玉ふ。『我れ則ち命終の時決定して極樂に生せしめん』の願なる故に。此天に皈依し奉る。『證文』酒泉記に經を引て言はく。心

を誠にして。聖天菩薩に仕へ奉れば。決定して菩提道場に引導せん』と見へたり。大日經の疏に曰く。此一門より法界門に得入す』と云云。かく尊き誓願なれども學者多くは名利の碩學なれば。徒らに隱没して演ることなし。或るは會通し難き故に。秘密に托してこれを説かず。本誓功能を秘藏して談話せずんば。在家いかでか利益を知悉せんや。故に貴賤男女信ずべくもあらず。或るが中に稍貴しと聞き觸れ尋ねけるに。碩の法師輩は慄戰により。其教化を受けしものも。これに倍して念ずることなし。此故に利益を蒙らず。豈に不便の至りならずや。總じて此天不信の輩は。現世には災難來り。命終の時には

五〇  
四魔の障碍有る故に多智禪定の人も是によつて往生  
成佛成り難し。四魔の沙汰は『智度論』第五に見へたり。此  
内他化自在天魔といふは一切如来諸佛菩薩明王諸天  
等に至るまで降伏したまふことなりがたし。只聖天一  
尊のみなり。此故は調伏神力の七の持物あり。殊には十  
萬七千の諸眷屬皆ごもに拂ひたまふに。嵐に木の葉の  
散りしにも勝れり。

六六菩提……圓滿軌に言はく、來世必ず阿耨菩提道を得て速に佛  
陀究竟位に登らん故に此天の法は人間に希有なり。文。肝心集  
に言はく、誠心に聖天菩薩に仕へ奉れば決定して菩提道場に引入  
すと云々。

聖天靈驗のことは經論軌記等に廣博く説けるよし具  
さなる書等も數多ありと聞き觸れし。予が見聞の分齊  
にても見る人情らんことを慮りて僅に書すのみ。一を  
以て萬を知るの利。是を思ふべし。故に某甲歎を含みて  
涙を押へ。此一事を書き集めて。以上求菩提下化衆生の  
爲めに開板せしむ。今方に編纂するに當りて。自宗粗學  
の輩。越三昧耶の罪あらんご。定めて訾毀するならんも。  
豫て期したるごころなり。能く思へ。謂はく諸佛菩薩明  
王諸天神等。これみな衆生を利益し。慈悲を元ごした  
まふごころ。誓願なれ。出家は佛の金言諸尊の本誓。巨益を  
讚歎し。衆生を化度するごころ。本願なれ。甚深の功德も勸

めざれば無益ならん。然る間此書を難せば。天の御心に  
背くべし。聖天の障碍は行者にこそあらめ。彼の秘法修  
行の時謬るここあれば忽に難あるも。道俗男女信ずる  
輩に崇を爲したまふの理あらんや。まここに意餘りて  
言葉足らず。故に其證文上に悉く述べ來れり。若し有縁  
の輩は此抄を拜見し。聖天尊に皈依し奉り。二世の求願  
を祈り。十指爪掌を合せ。五體投地して恭敬禮拜を爲す  
べし。南無大悲大聖歡喜雙身天王。自他法界平等利益敬  
白。

寛文十一辛亥曆八月十六日

勝尾寺瀧谷大木食以空謹撰

六七 聖天具書……陀羅尼集經。使呪法經三本。菩提留支譯。弘法大師  
請來。大明呪賊經。末度成蓮抄に載せたり。佛說金色迦那鉢底陀羅尼  
經。金剛智譯。毘那夜經。毘那夜迦經。蘇悉地經。寶樓閣經。菩提場經。妙譬  
經。華鬘經。宿曜經。蘇波呼童子經。團湼拌經。權現金色迦那鉢底九目天  
法。菩提留支。菩提留支法。愛敬法一卷。金剛智。聖歡喜天式法一卷。般若  
惹羯羅三藏譯。肝要集。金剛智。不空三藏所譯軌一卷。善無畏軌一卷。歸  
依念誦法とも云ふ。定惠均等軌一卷。不空譯。金剛童子儀軌一卷。不空。  
大日經疏。大日經義釋。大自在天法則儀軌一卷。不空。權現歡喜法一卷。  
毘那耶迦法。毘那夜迦儀軌。太元儀軌。愛敬圓滿軌。一行禪師。十一面軌。  
金剛夜叉軌。秘密成就軌。大聖歡喜天儀軌一卷。靈驗要術法三卷。舍光  
軌一卷。大師在唐軌。憬瑟記一卷。使呪法開子。火布惹。大抄。肝心抄。慈記  
教抄。都記。九目提婆羅惹。酒泉記。歡喜抄二卷。隨聞記。相承秘決。式法決  
十一。形求抄。禪林記。慈覺傳。他門抄。智證述。番法決三卷。智證大師記。谷

抄。聖天記一卷。(成蓮)大聖天教行次第第一卷。(安然)聖寶藏神儀軌。定賢法  
 務祕傳。醍醐實運祕傳。皇抄。三寶院勝憲僧正傳。仁和寺宮心鈔。成典僧  
 正記。山王院。性信大御室御傳。理趣房寂圓記。般若寺僧正次第。  
 右頭書一より六五に至る並に具書即ち六六に列は台密兩宗の學侶詳  
 見希有の故に、南山傳昌之を記す。

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

# 玉かゞみ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



玉かゞみ目次

- 第一 總說眞言功德章
  - 第二 別明光明眞言功德章
  - 第三 對辨名號章
  - 第四 眞言成佛章
  - 第五 女人成佛章
  - 第六 學都婆功德章
  - 第七 加持土砂功德章
  - 第八 眞言字義釋章
- 已上

玉かゞみ

總說眞言功德章

つらく世間の無常をくわんさうするに、王公ご申し  
 たてまつれども、あさましき人間のわづらひをも、のが  
 れさせ給はず、朝に玉のうてなに錦のしごねをかざり  
 ぬれども、ゆなへのけぶりさなる身は、ばせをの風にあ  
 るが如し、死門はあゆみにしたかひてちかし、れうらき  
 んしうは三途のはだへをかくしがたし、ほうせきのむ  
 つごごは、しばしのこだまのひいきに似たり、くわよう  
 かうがんのよそほひも、槿花一日の榮におなし、又は、め

なれぬ草のうへに、その名ばかりのこれり、黒かみはよ  
もぎがもごにまごへごも、たれか是れをはらはん、白骨  
は草むらによこたゆれごも、これをいなくものさらに  
なし、まごごに夏の夜の夢にこごならず、せうじやひつ  
めつ、このこはり、口にひて身にしられず、たごへば驚  
駭のむちになれたるたぐひなり、ひきかへておごろか  
せたまへ、まごごにうけがたき人身をうけさいはひに  
あひがたき密教、くわうだいむへんのくごくたつごき  
光明眞言ごなへさせたまひ、げんごう二世の祈ぐわん  
なさせたまは、利益なにかはむなしからん、爰に高祖  
大師の御釋にいはいはく、冒地の得がたきにあらず、此法に

あふこごのやすからざればなりご釋したまへり、ばう  
ちごは梵語、智惠の義なり、總して一さい宗門ご申せし  
こご、しやかによらい御在世の時はそのわかちなし御  
入滅二千餘廻の後、三國に入宗傳來す、其外わがてうに  
て興行の新宗なり、然るに眞言一宗は大日如來の所説  
三世常恒の法なれば、法爾法然の宗門なり、さる程に分  
別聖位經に、しんごんだらにしうご、しやかによらいも、  
ごきたまふにより、諸宗にすぐれて最上しごくの宗旨  
たり、これによつて、しんごん宗のすゝめには、げんごう  
二世のりやくある也、大唐せうりうじ惠果和上の御し  
やくにも、人の中にたつごきは國王、法の中にさいしよ

うなるは密教なりとしやくしたまふ爰をもつて善導和尚も餘きやうにもれたるを、だらにをもつてこれを利すごごかせたまふ此ゆへは、ねんぶつはひごへに他力による、しんごんには以我功德力によらい加持力及以法界力にて、此三力によれば末法劫末のさきにも、しやうりのりやく有へしごみへ侍るなり、六波羅密經にいはく、或はまた、うじやうもろくのあくごう四重八重五むけんさいをつくり、はうごう經をそしる一せんだいごう、しゆくのちうさいをしやうめつする事をねせしめ、そくしつにげだつし頓にねはんをささる、しかもかれがためにもろくのだらにさ

うを説くご云々、まごごにありがたくも三大僧祇のしゆぎやうを一念の阿字にさね、一字のしんごんあれば大じやうごても、ごんぐのものも唱へやすし、智あさきさても呪力ふかければ利やくむなしからず、くわんねんせざれごも三力の加持なれば、しつちじやうじゆしやすし、げんぜうには、さいしやうをはらい、ごうらいにはぼだいをねて、九ほんれんだいのまへに彌陀のせいようを、はいせん事うたがいなし、

### 別光明眞言功德章

それしんごんしうは大じやうなり、種々のひみつありご申せごも、中にもくごくすぐれてたつごきは、ひごへ

に光明眞言なり、これを唱ふる人は、あくじさいなんを  
 のぞき、ふくじゆぞうちやう、あんおんけらくをかうぶ  
 り、諸じん諸佛はくわんぎ、いつかしたまい、後世にはす  
 みやかにじやうぶつす、女人は變成男子そくごく、じや  
 うぶつの利やくあり、ばうこんごぶらひのためには、な  
 ほもつてくごくすぐれたり、そこばに書いて、はか所に  
 立てぬれば、上はひそう天下は無間ならくの、くるしみ  
 をすくひ、たちまちに其ようごう(溶銅)へんして入くご  
 く水の池ごなる、れんげ生じてあしをうけ、ほうがい  
 たいきにごまり、そのはちす飛がごごく、せつなに極樂  
 に生じて、あんらくを得るごいへり、光明眞言をこなふ

る人は一切の怖畏をのぞき、あるひはいかつちのなん  
 しつびやうをものがるゝ事は、そだせんたごいひし、や  
 くわうじゆ(藥王樹)にたごへたり、守にかくれば、じやま  
 げごうもおそれをなす、そのゆゑは眞言こなへし、ぎや  
 うじやの息風にふるれば、一切のちくるいにいたるま  
 で苦果をげだつし、一佛地の界會に入る、いはんや唱満  
 の人においてをや、くわしくは儀軌の中にみえたり、此  
 眞言をこなへて、くごくふかき事は、日月は天に居し、世  
 かいのやみをてらして、ぼんなふのやみをてらさず、今  
 の光明眞言のごごきに至りては、外には生死のやみを  
 めつし、内にはぼんなふのごうをのそくご、ねごろの覺

饒上人しやくしたまへり、此光明眞言は先づさんじん  
ちの三ごくをのぞく、内にはうしゆのかたちあり、れん  
げあり、光明あり、そのたい月りんなり、然るにほうしゆ  
は、よくさんよくをのぞき、れんげはすいせうにて、しん  
いの火をけし、光明はぐちのあんしやうをてらすなり、  
これらのしやうもん、大灌頂光明眞言の儀軌にめいは  
くなり

對辨名號章

光明眞言と彌陀の名號との、くごくしやうれつをたい  
べんするに、あみだによらい一たいのうへに、せんりや  
く深秘のかはりあれば、しんごんごめうがうこの、くご

く大きにかはれり、そのゆねは陀羅尼のくごくは日月  
のごとしと説たまふ、そのうへ此眞言一へんごなふる  
くごくは百おくむりやうの大乗經、おなじく法門だら  
にをじゆするにひごし、そのくごくさいしやうたりご  
大日如來、さんだんしたまふなり、  
又わうぜうごじやうぶつごは、かくべつの事なるを、お  
なじやうにおしやり、大にあやまれり、そのゆねは觀經  
の疏に見へ侍るにも、彌陀のめうがふをこなへての、く  
ごくは三心具足のねんぶつにて、わうぜうまてはい  
たりぬれごもじやうぶつは成がたし、いかにいはんや  
三心なき人をや故に修雜不至心者往生千中無一と善

導和尚も往生禮讚にのべられたり、そのみならず淨土のくわんぎやうに三輩九品のわうぜうをこきたまへども、じやうぶつはこれなし、

眞言成佛章

又しんごんごなへて、じやうぶつする事は、十方世かい三世の諸佛みなごごごく、ひみつしんごんのしゆぎやうによりて、じやうがくを得るご、守護國經にしやかによらいも、ごかせたまへば、ほごけはなごか、もうごはのたまはじ、光明眞言はもうねんふじやうの心にて、ごなへさせたまは、わうぜうはそのまゝまんぞくし、しんごく、けんごにごなふれば、そくごくじやうぶつ、又

たがひなし、されば、まつだいのぼんぶ、ふじやうをねらばずごなへよご、大日如來すゝめ給ふ、じやうもん儀軌にあきらかなり、

女人成佛章

業報差別經にいはいはく、女人は佛法の藏なり、そしる人むけんにだすべしごあり、又ねはんぎやうの心によるに、たごひすがたは女人なりごも、自身にほごけのたいせうありごしらば、女人すなはちおごごなりごごき給ふ、そのみならず、地藏菩薩はばらもん女ごいひし女人にていませしが、慈悲第一にして、ごごにしんごく、けんごなれば、ぼさつにならせ給ふ、ごごまさに地藏本願經

六八  
の大意なり、爰を以ておもふに此のばらもん女も十界  
輪圓未代の女人も十界りんねんなれば、そのかはりな  
し、然ればくごくくわうだいの光明眞言けんごにこな  
へさせ給はよ、女人じやうぶつする事なごかうたがい  
あらじこそ、

### 學都婆功德章

さて光明眞言を學都婆にかきて墓所にあんちすれば、  
かの靈こん、ごくらくじやうごにわうぜうし、じやうぶ  
つのは眉間よりひかりをはなつ、去によつて光明眞  
言こなづくご、ごきたまふ、それ學都婆のかけは朝の五  
つより午の時にいたるまで、無間八難のそこにしづめ

り、日中より後は、ひそうでんにいたる故にてんじやう、  
および八なんのそのあく人まで、光明眞言のひかり  
にてらされて、くげんまぬがれ、わうぜうをさぐるなり、  
學都婆は大日によらいの三摩耶形、光明眞言は一切の  
まんごく、五智のによらいの大ひみつしゆうなり、又光  
明眞言一遍こなへて、ぼうこんにゑかうすれば、阿彌陀  
如來御手をさづけて、ごくらくじやうごに、いんごうし  
たまふ、四十九へんこなへてゑかうすれば、無量壽如來  
かの靈を荷負して、ごくらくに生ぜしめたまふ、又ごく  
ちうあくにんありて、ちごく餓鬼ちくせうあしゆらご  
うにおち、そのくるしみを、まぬがるゝ期なきものゝた

めにも、おのく、四十九へんごなへてえかうすれば、そのくるしみをまぬがれ、じやうごにわうぜうすご、じやうもん儀軌に明白なり、されば醍醐の武谷の乘願房の上人ご申すは、法然上人の孫弟子にて、じやうごもんのめいしやうなりしが、或時二條院より、ぼうこんぼだいのさぶらひには、いつれの法がまされたるご、ちよくせんの下りければ、密宗の寶篋印陀羅尼、光明眞言より勝たるは御座なしと奏し申されしなり、わうぜう淨土の本文には此しんごんを出せりご、惠心僧都も往生要集の中にかきたまへり、智證大師の御釋にも、しんごんは大じやうの中なかの王わう、秘ひが中なかの最秘さいひと云ひ、法華ほつげなをおよ

ばず、いはんや餘經よきやうをやこのへ給ふ、梅尾明惠上人ばいめいめいしやうじんには文殊直もんじうぢくに此光明眞言くわうめいしんごんを授けたまふ。

加持土砂功德章

まここに光明眞言くわうめいしんごんのくごく、くわうだいなりし事は、わきて土砂つちさのしやうごにてしらるゝ、其故そのゆゑは心なきまごなりご申せごも、光明眞言くわうめいしんごんにて加持かぢする事こと一百八遍ひやくはちへんにして、此土砂このつちさを尸陀林しだりんのうちうちにちらしぬれば、じやうごにおくるこのへ給ふがんぜんにもしやうごあり、悪人死あくにんしして身みすくみ木石ぼくせきのごこくなりしに、土砂つちさを一粒ひとつぶ口くちに入るれば、その巨益こやくにより、しがいやはらかになるなり、其外そのほかまのあたりいろく、巨益こやくおほし、いづれの宗しゆ



門の人なりとも、さづかりて是を唱へらるべきなり、そのゆゑは未來世のものゝために、此光明眞言の法要を、ごかんご、大日如來のへたまふなり、或はさうぎやうなごゝいひ、又はたのみし宗門にてなしなごゝ、へんはの心をおこして是をぶ信心のかたゝは、たからの山に入りながら手をむなしうして歸るがごこし、悲いかな三途のきうりに立ちかへり、あくしゆのくるしみをうけん事、まごこに池邊のわらはへを見しに、ごこならず、されば此眞言にまんごくの巨益演説したまふ事かぎりなし、今淺智短才の愚案にまかせ、見聞する所あらまし書あらはすものなり、

眞言字義釋章

毘盧遮那佛說金剛頂經光明眞言曰

唵阿謨伽尾盧左曇摩訶母捺羅摩尼鉢納麼入縛擻鉢羅

轉多野吽發呢娑婆訶云々

所謂字ごはうやまふぎなり、**唵**ごはこんがうかい、たいぞうかい、れうぶの大日如來なり、**阿**ごはてんちのしよじんなり、**伽**ごは一さいしゆせうのしんたい也、**尾**ごはくわんおんのじやうごの相なり、**盧**ごは三世のしよぶつ、のいめやうなり、**左**ごは一さいのしよほうなり、**曇**ごはもんじゆぼさつなり、**摩**ごはごうりてんに生するなり、**訶**ごは八だいらうわうなり、**鉢**ごはちぞ

うばさつなり、愛シツは三がいしゆぜうのかたちなり、  
 此コノは五十大じやうきやうなり、クは十らせつとな  
 り、リは十大でしなり、ハは八だいちごくのくるし  
 みをまぬがる、言コトなり、殊ニ更ニ當ニ來ニの導シ師シみろくばさつ  
 なり、スは四大尊ニなり、一さいじやうじゆのぎなり、ハ  
 久クはちごくをはれつして、じやうごゝなる言コトなり、ハ  
 奇キは五ぶつのみつごん證シ得ル大ダイ菩ブツ提テイ果カ言コトなれば、此コノ眞シン  
 言コトにもるゝこと更ニになし、これしかしながら二世ニのま  
 んぞく何ニ事ニかこれにおよばん穴アナ賢ケン穴アナ賢ケン  
 愚グ僧ソウ百餘種ヒャクニョウシュウのしよくもつをたちし事コトは、一さいごみん

巳 上

(士民シミン)のわづらい、しようか(商家シヤカ)のいごなみをおもひて  
 んねんごみのりしこのみを、わづかに掌テのうちに以もつて、  
 一じきとして廁シ虫ムシをやしなふ、これをていかきやう(定テイ  
 家カ卿キョウ)も春ハルのさなへ秋アキ田タかりほすぞめきまで、くるしく  
 見ミゆるしづのおだまき、ごながめ給たまふ、さてばさつの三  
 じゆじやうかいは、一さいしゆぜうくご(救ク度ド)のくわん  
 有あり、總すべじて出家しゅつがさいひしは持ち戒かいをもごゝす戒かいなきを  
 さいけご申まうすなり、これぶつでしのさだまりし所ところなり、  
 ゆちや(湯ゆ茶チャ)をぶくせざるは、ふせつせうの心こころにていま  
 せし、うすきゑぶくは、ぼうせき(紡イト績セキ)のくろうをおもへ  
 ばなり、一せうがい、ちうやの不ふ臥ぶは、ねぶりをさまして、

光明眞言をすへん(數反)となへて三がいになでん一さ  
いのきせんりやうごうびやうごうりやくのためいき  
ぐわんるかうしたてまつる、  
願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道

大僧正 以 空謹書

木食以空上人御傳記

木食以空上人御傳記

# 以空上人御傳記

長谷寶秀僧正述

城州山崎妙音山觀音寺開基大僧正木食以空上人勅號  
 を等引金剛と云ふ江戸に生る土岐山城守頼行の庶子  
 なり、妾の出なるを以て攝州村田彌右衛門重定の家に  
 養はる、幼にして儒書を習ひ、十六歳秋攝州大仙寺湛月  
 和尚に隨つて禪を學ぶ、二十一歳藝州嚴島明神を拜す、  
 明神夢に現はれて汝出家して眞言を傳授すべしと告  
 げ給ふ、故に萬治元年正月同國上不見山極樂寺に參籠  
 する、ここ一七日間、毎日溪水に身を浴し、又食を斷ち、晝  
 夜法華經二部を讀誦し、一心に觀音を禮して出家成就

を祈る、翌年三月高野山に登りて出家し四度加行を修し、翌年傳法灌頂を受け、眞別處に於て自誓圓具す剃度の師灌頂の阿闍梨等今詳かならず、後ち攝州應頂山勝尾寺に移り住し、三十一歳より穀味を斷ち、一日一回水を飲み果を食して精進修行す、勅に非ざれば山を出でず、禁足十年に及べり、云ふ、寛文二年三月、後水尾法皇並女院上人を宮中に召して光明眞言を講ぜしめ給ふ、上人太旨を記して兩院に献りたるに法皇題號を賜ふ、世に傳ふる所の玉鏡一卷、即ち是なり、其れより院宣を蒙りて御願を祈る、法皇より五銖水晶念珠、御製和歌一紙等を賜ひ、女院より御筆の色紙、琥珀の念

八〇

珠等を賜ふ、同年八月六日より起首して一百ケ日、歡喜天花水供を修したるに、瓶花の檜芽を出し根を生ず、此檜今尙勝尾寺にあり、其後毎日晝は光明眞言一萬遍を誦し、夜は朝日山に入て阿字觀を修す、既に悉地を得て、暗夜に能く書を讀み、土砂を加持するに、土砂増加す、此に依て道聲選邇に聞ゆ、寛文十年五月十日、應頂山瀧谷に於て夢に歡喜天四臂の童子となりて、現はれ、伽陀を唱へ、除死難の印明を上人に授く、是れ歡喜天守加持の印なり、その伽陀は所現和光利物表、事理圓融、遍法界、衛護三寶、度衆生、我即大聖

八一

歡喜天上人乃ち童子の木像並に畫像を作りて寺に安  
 す、木像は自ら刻し、畫像も亦自ら畫く、  
 同年六月十三日同處に於て修法の時、着する所の袈裟  
 の上に於て舍利を感得す、  
 寛文十一年八月道俗四衆の爲に突誓傳一卷を著し廣  
 く天尊の内證功德並に行者の用心等を記す、其月梓に  
 刻し世に弘む、冠注は當時高野山無量壽院傳昌の加ふ  
 る所なり、  
 延寶元年六月下旬、東福門院(後水尾院皇后)の勅を蒙り、  
 湯殿日光の兩山並に相州江島に至りて御願を祈る、其  
 の江島參籠の時舍利を感得す、八月七日五更なり上洛

して之を東福門院の御所に獻す、女院深く歡び宮中に  
 於て供養し給ひ、後ち崩御の前、上人に還附し給ふ、  
 延寶二年先きに寛文十年六月十三日感得する所の舍  
 利を本尊として求聞持法を修す、二月十五日夜道場を  
 出で、坐睡の時、ひこりの異僧現はれて告て曰く、此法  
 滿坐の後、は此舍利を以て嵯峨法輪寺に寄附すべしと、  
 上人夢の中に之を諾す、依て同年六月五日自ら携へて  
 彼寺に至り、感得來由記一卷並に僧伽黎衣一領を添へ  
 て之を寄附す、是より先き五月中旬、寺主宥尊眞身舍利  
 吾寺に入るべし、更に三日の内に尺の氷降るべしと夢  
 る、乃ち女院に此由を奏す、聞く者怪みて信ぜざりしが、

後ち果して夢る所に違はざりき、四衆結縁の爲に七日  
を限りて拜見を許す、道俗争ひ來て之を拜す、其後法皇、  
上人に勅して舍利感得を祈らしめ給ふ、上人辭するこ  
ごを得ず、五十日を期して之を祈り、結願の日夜半の頃、  
又一顆を感得す、之を法皇に献するに、法皇殿内に安置  
して供養し給ひ、一百餘句を経て上人に下し賜ふ、  
延寶三年四月中旬、嚴島明神の法樂に供へんが爲に、三  
七日間辨才天法を修するに、一夕夢に天女現はれて、汝  
が着する所の袈裟を我に得させよと告げ給ふ、何れの  
處にか献るべきと問ひ奉れば、一首の歌を詠じて答へ  
給ふ、其の歌に云く、おほひてらす、かほる衣を、ほごこさ

ば、うけてうやまふ、しまの社に、ご歌の意は孔明の香衣  
を施さば、嚴島の社に納むべしとなり、依て夢に見る所  
を記し之に一絶を附し、袈裟に添へて彼の社に奉納す、  
其の詩に云く、夢裡靈歌嚴島涯、相逢天女献孔明、福田佛  
種虚不播、宜待龍華結果時、ご同五年七月、嚴島に詣り終  
夜神前に法樂を捧ぐるに、天女波上に現はれ、彼の僧伽  
黎衣を兩手に掛け、前の和歌並に献する所の一絶を朗  
吟し給ひ、少時にして消ぬ失せ給へり、  
延寶四年四國靈場を巡拜し、六月朔日、讚州白峯寺に宿  
す、其夜神人現はれて告て曰く、吾は是れ石鎚山權現な  
り、汝我山に躋らんと欲すれども、果さず、豫州前神寺は

吾が影像を安んず汝往て我を拜すべしと即ち歩行十  
五ケ日を経て彼寺に至る別當宥清上人を見て喜びて  
曰く我先きに奇夢を感じ豫め閨梨の我寺に來らんこ  
こを知れり上人曰く我亦奇夢を感じ試に各々其  
の夢る所を記すべしと此に於て兩人各記し共に之を  
見るに宛も符節を合するが如し相伴ひて神殿に入り  
法樂を捧ぐるに扉自ら開けて神像現はる相好莊嚴夢  
中の所見に異ならず宥清嘆じて曰く此像堅く鎖して  
古より以來開扉せる者なし今扉自ら開く奇と謂ふべ  
しと又此頃讚州五劔山八栗寺に躋り山を穿ち巖を鉅  
りて一字を造立して始て歡喜天を勸請す

延寶七年八月十八日より起首して十日間河州天野山  
金剛寺に於て結緣灌頂を行ふ受者道俗男女一萬五千  
二百十五人及び黑白二犬なり上人彼の寺に着せる夜  
大師夢中に現はれて告て曰く汝結緣灌頂を行ふ利益  
廣大なり我黑白二犬を遣して入壇せしむべしと翌朝  
夢を寺僧に告ぐ二十三日夜泉州堺車の町某家の白犬  
來りて群集の受者に交りて入堂し灑水覆面を受け密  
を兩手に挟み引入者に引かれて香象を越ぬ壇に向つ  
て投花して中台大日尊を得阿闍梨の前に至り八葉座  
に坐し當尊の印明を授かる時聲を出し八祖禮等皆人  
の如くす見る者皆驚く其れより寺中行學九十坊の犬



八八  
を引き來りて入壇せしめんとするに、皆逃れて道場に  
入らず、二十八日結願の夜、同國横山九鬼村社主源右衛  
門飼ふ所の黒犬來りて入壇す、所作悉く前の白犬の如  
し十ケ日を経て後、此の犬投花包を頸に掛けたるまゝ  
石上に頓死す、上人尙ほ天野山に滞在して、此事を聞き、  
加持土砂を與へて懇に葬らしむ、  
延寶八年四月將軍家綱公病む、上人及び台密の諸師を  
殿中に請じて平復を祈らしむ、台密の諸師は命のまゝ  
に専ら平復を祈る、上人獨り肯かず、壽將に盡きんぞす、  
如何ともし難しと云て、敢て禱らず、家光公の一女千代  
姫君(家綱公の姉にて後に尾州侯に嫁したる姫なり)之

を聞いて深く悲み、せめては上人の加持力に依て病中  
の苦惱を除き給へと請ふ、上人乃ち諾して加持するに  
苦惱頓に止む、依て西天竺渡來の無盡意菩薩の銅像一  
軀、其他種々の物を上人に賜ふ、將軍久しからずして薨  
す、全く上人の言の如し、是に依て尾州一族深く上人を  
仰ぐ、  
延寶九年上人城州山崎の地を乞ひ、攝州應頂山を去り  
て移り住し、嶮を夷げ巖を鉅りて一寺を建つ、千手觀音  
の像元より此の山中に在り、此を奉じて本尊とす、因て  
觀音寺と號す、彼の像を修繕する時、御首の内に一軸あ  
り記して云く、上宮太子手彫大悲金剛御丈五尺五寸首

内納五色五粒佛舍利寛平法皇昌泰二年艸創と依て此  
像は聖徳太子の作此地は寛平法皇開創の地なること  
を知れり又地を開く時土中五尺の底より薬師醫王の  
石像を得たり銘に妙音山寛平法皇創建地とあり依て  
妙音山と號す千代姫君家光家綱兩公の菩提の爲めに  
金堂一字を造立せらる其他佛閣僧坊不年にして成る  
靈元天皇勅額を賜ふ妙音山の三字を書す是れ即ち宸  
筆なり然るに未だ鎮守を設けず  
天和二年八月十五日夜上人先きに勝尾寺に於て供養  
せる所の歡喜天雲に乗じて飛び來れり依て奉じて鎮  
守とす明正院天尊飛來の夢想を蒙り給ひて同年寶殿

拜堂を造立し給ふ  
天和二年六月旱魃畿内大に苦む此月三十日山崎の民  
上人に祈雨の法を修せんことを請ふ上人曰く來月三  
日少雨四日旱し五日豪雨十里四方潤ふべしと七月朔  
日上人自ら心經を書寫し每字雨冠りを加ふ此の如く  
するここ七卷なり別に祈願書を添へ作兵衛といへる  
農夫に雨具並に此經を授けて命じて曰く此の山頂に  
龍池あり汝此の經を持して山頂に至り之を彼の池中  
に投ずべし投ずる時忽ちに沈まん其の時必ず雨降る  
べしと作兵衛教の如くするに忽ちに雨降る凡て上人  
の言の如し農民大に喜び彌々上人の徳を仰ぐ

貞享十二年靈元天皇勅して等引金剛の號を賜ふ其の  
院宣の文に曰く、

蒙 叡慮演書以空斷穀味一喫護持淨戒播芬馥石上  
禪耀烜珠積薰修瑩勤既得法驗昔日從勝峰閑居

圓淨法皇 女院共令祈御願依 仰眞言利益纂抄貢  
兩院初延寶九年山崎觀音寺開基自其以來不勸奉

加以行法力建立佛閣坊舍葺麗以彼是協法至德故  
主上春宮寶祚使禱今奉 詔獻如實知自心編書時有

勅願令被祈不空絹索密法給處忽 御願成就故宣  
加崇飭之典仍 宸翰賜曰以空等引金剛

貞享三年二月十六日 勅ありて正僧正に補せられ御

願狀を賜はりて聖天供を修し主上太子の寶壽長遠を  
禱らしめられ且つ毎月參内して玉體を加持し奉るこ  
ごを命ぜらる同四年八月東山天皇の勅を蒙り二枚屏  
風一雙に大字並に墨繪を書て獻る觀音寺の地は離宮  
八幡宮の神領なりしが  
寶永三年詔ありて山崎觀音寺山林境內諸役免除の御  
朱印地となされ度由仰出され勅使關東に下りて將軍  
に其旨を達す翌年二月二十日上人山崎を發し三月朔  
日江戸に着し四月二十三日三宅備前守康勝の亭に於  
て同役鳥井播州忠救堀左京亮直利本多彈正少弼忠晴  
列座し鳥井忠救より御朱印を上人に渡され五月朔日

上人登城し、將軍綱吉公、亞將家宣公に謁す、同七日御暇乞の爲め登城して時服を拜領し、十三日江戸を發し、二十四日觀音寺に歸着す、六月五日所司代兩奉行所に出で、御朱印頂戴、同八日參内して御禮を言上す、寶永六年八月十九日、東山院の勅使觀音寺に入り、上人を大僧正に任ぜらるべき旨勅約あり、而るに新帝(中御門帝)疱瘡に罹らせられ、新院(東山院)亦疱瘡にて此年十二月十七日崩御し給ひ、事遷延す、然れども先帝の遺勅あるを以て、同七年九月二十六日上人を宮中に召き、新帝(中御門帝)御誕生以來、長日御加持を勤修し、御不例なし、且つ近々御即位あるべきに依りて勸賞ごして大

僧正に補せらる、同年十月二十二日參内を命ぜられ、勅ありて禁庭に杖をつくことを許さる、正親町前大納言藤原公通卿、深く上人に歸依し、元祿十六年觀音寺緣起一卷を記して寺に寄附し、正徳元年更に追加し、委しく上人の徳行を叙す、今尙同寺にあり、享保四年七月十三日上人示寂、壽八十四、上人廣く内外の學に通じ、書畫を善くし、彫刻に巧みなり、終生穀味を斷ち、修法怠らず、行徳甚だ盛んにして、後水尾院、明正院、仙院、東山院、及中御門帝の五代の天子、深く歸依し給ひ、屢々參内して玉體を加持し奉る、其の觀音寺を建立す

るに當りては、敢て勸進を用ひず、公卿百官各國諸侯争ひて諸堂を造立し、金品を寄附し、數年にして輪奐の美を成す。是れ偏に上人の盛徳に依る、其の著作は窀誓傳一卷、玉鏡一卷あり、共に世に梓行す。而るに上人の徳行多く世に聞へず、今上人草稿の緣由記、藤原公通卿の觀音寺緣記等に依て略ぼ大要を記するのみ、

己上

### 大木食以空上人御生家の口牌傳説

玉山啓峰

以空上人の祖先は土井阿波守の家老職たりし、父を忠兵衛と云ひ三人の兒女ありて上人はその次男たり、土井公の家老職三名あり、互に相嫉み忠兵衛は他の二人の爲に土井公に讒せられ、遂に家を缺處ごなし、郷拂の命を受けたり。是に於て轉々苦境に陥り、北中島村辻堂に知人あり、一郷の庄屋を務む、その人大に同情せられ、忠兵衛の爲に糊口の途を周旋せらる、その世話に依て居を島下郡烏飼村字西の村に定む、烏飼は高槻領なる

土井阿波守は下關國古河の城主八萬石を領す、播磨三島郡にては安威村半部三宅村大字、東瀬良宜全部とを領せらる

を以て住するに妨げなし、時に高槻領主永井日向守に  
仕へんことを勧めたれども、再ひ士分となるを深く愧  
て固辭す、郷拂の際に主公より下されたる金十兩を資  
本として農に歸し、油絞業を營み七辛八苦大に富を殖  
し、私有田園十六町七畝歩を所持するに到る、その後土  
井公には前非を悔ひ歸郷出仕を許せしも、農として土  
着せんことを希ふ、仍て土井家の姓と定紋とを許し、忠  
兵衛を慰められたり、云ふ、紋所は丸に八ツの土車な  
り  
以空上人御年十四歳の頃より金錢を浪費せられ、父母  
の誠めも其効を爲さず、日夕に放浪遊費す、父母之を愁

ひ一郷之を歎す、遂に兒の見込なきを以て家を逐ひ門  
の出入を禁す、茲に於て上人翻然として悟る處あり、僧  
侶とならんことを發念し、父に請へとも容れられず、故  
を以て近里の知人に囑し、重て父に通せんことを乞ふ、  
郷人大に其意を諒し、父母に上人の悔悟と將來の覺  
悟とを告ぐ、父母尙容易に之を信せず、然れども豚兒の  
爲に迷惑を郷黨に及さんことを懼れ、止むを得ず、父自  
から兒を伴ふて江南河内國庭江寺村の一庵寺に同行  
し、兒か今日までの不行跡を陳へ、該兒をして一人の僧  
たらしめ、玉はんこと頼み入りたり、時に上人二十四歳  
の頃なりしと、庵主之を奇とし、本人の大覺他日大に觀

る所ある可しとて快諾せらる居ること三年師の命に能く服し大に謹慎して戒行を持つ一日決然として志す所あり師に請ふて曰く三ヶ年間の暇を賜はらんことを師その旨を問ふ北山に勝尾寺と稱する名利あり、諸宗の龍象皆此山に參籠せらるると余も亦た研究を此寺に到りて爲さんと欲す師その志を嘉し之を許され勝尾寺に登られたり

高野山の傳説には上人放蕩の結果身を置くに所なく遁れて高野山に登り隅の坊に身を寄せられたり、或時高野山藤之坊の院家上人を一見してその常人ならざるを知り藤之坊に引取り出家せられたり

も聞く

後 聖上陛下御不例の際上人の祈願に依て御平癒遊はされたりとて 陛下より

御脇差

壹腰

御書物

壹通

を添へて下し賜はる傳へて土井家にありその後御書物は紛失し御刀は轉々して目下大阪雑魚場の某家に秘藏せり、現今土井家に保存されあるは上人の御念持佛たりしと云ふ

觀音像

金銅立像

一寸八分

印度佛

此佛像は本傳記に將軍家千代姫君より西天竺渡來の

無盡意菩薩の像壹軀其他品々を上人に賜ふごある、その無盡意菩薩の尊像ご拜見せり次に

南無普賢菩薩

ご并書せる 壹軸

南無大師遍照金剛

此の御寶號の軸には木食以空ご自書せられあり  
以空上人御入定の時遺言に往生は仙臺公たらんご召  
使に告て曰く、その方は仙臺公に仕へて門衛ごして貫  
ふ可しごて、一の契符を與へて入定せられたり、果せる  
かな仙臺公に生れられ、山崎觀音寺に對して永世七十  
人扶助ご竹に雀の紋章入りの打幕を下されたり上人  
平素は北河内葛葉村釋迦寺及ひ大和國西大寺主ご親

しく交友せられけりご  
大阪府三島郡鳥飼西の村に明治維新までは光照寺ご  
號する一院あり之れ山崎觀音寺より上人の御生地を  
紀念の爲に建立せられ、佛供田壹町貳反歩半を附しあ  
りたりしご云ふ(現今は廢滅)  
又御生家土井家の菩提寺は三島郡西澤良宜村蓮花寺  
(眞言宗)を菩提所ごす  
以上



當山以空上人遺品

三寶荒神

木像

壹體

三寶荒神

畫像

壹軸

歡喜童子

木像

壹體

上人感得

八幡大菩薩

畫像

壹軸

瀧見觀音

同

同

兩界万茶羅版木

壹枚

光明眞言万茶羅版木

同

後水尾院色紙

壹軸

盤若心經

後水尾院女院ヨリ  
下サル弘法大師筆

壹卷

(大相國清盛入道雷難  
ヲ逃レタルト傳フ)

高辻亞相豐長書狀

貳軸

御所持品 香合 五古 御守本尊 舍利

壹箱

僧伽梨衣

壹領

已上

貞享元年十二月十日凶

慧照院殿前城州太守心庵宗是大居士

土岐山城守頼行  
上人生父也

明曆三年十一月十五日凶

光榮院盈月明慶禪定尼

本多上總介内安部傳左衛門娘  
土岐頼行妾、上人生母也

寛永十八年九月八日凶

嚴臺院淨林慶順禪定門

攝州村田彌右衛門重定  
上人養父也

大阪西區市岡町

施主

八幡天然居士

大正十一年十月六日印刷  
大正十一年十月十日發行

【非賣品】

編輯兼發行人 布目文恭

大阪府三島郡豐川村大字粟生二千八百八十六番地

發行所 勝尾寺

大阪府同郡同村同字同番地

印刷人 岡本省三

大阪市東區內淡路町一丁目三十一番地

印刷所 株式會社 三有社

大阪市西區土佐堀通四丁目五番地ノ二

Handwritten initials or numbers inside a decorative square stamp.

終

